

立志のすすめ

はばたけ14歳

高めよう若い力自立の心
未来の夢に向かって

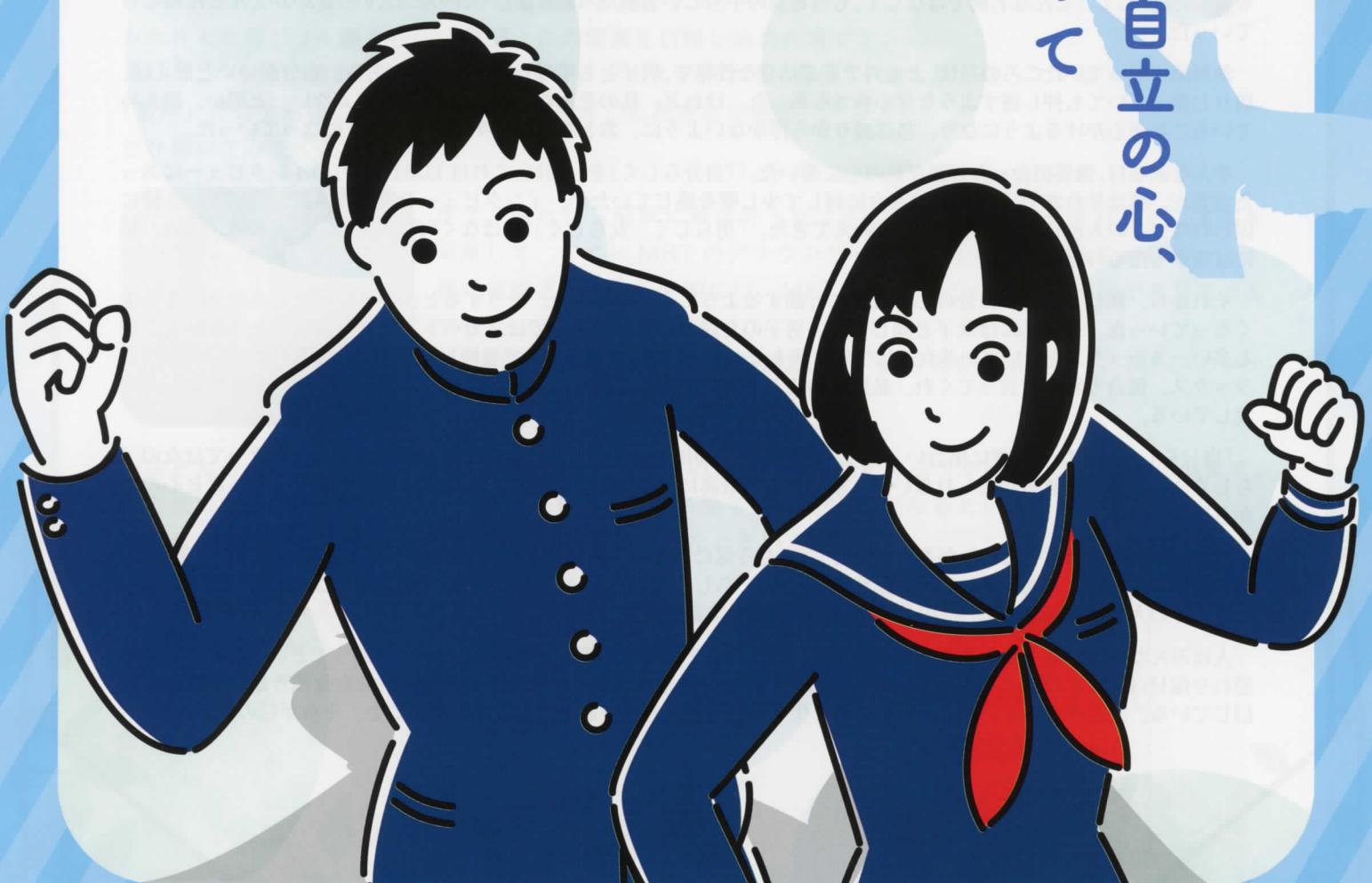
「若い力」

失敗を恐れず何事にも
前向きに挑戦する力

「自立の力」

大きな夢や希望をもち
独り立ちしようととする力

未来の夢の実現のために
より良い学校生活を送るために
将来よき社会人となるために
自己を振り返り、大人への
第一歩を踏み出しましょう。





本年度は、新型コロナウイルス感染の心配に加え、インフルエンザも流行する中で、昨年度と同様、参加者を発表者の関係者に限定して「青少年の主張宮崎県大会」を開催しました。ここに掲載した作文は、少年の部（中学生）の最優秀賞受賞作文です。大好きな自分の名前を巡る悲しく辛い経験からある言葉をきっかけに「自分らしく」生きることを決意し、行動も前向きに変わるとともに、そのような社会が創られることを強く願っています。

皆さんも、立志を迎えるにあたり、「自分らしく生きる」とは、どのような生き方なのか考える機会にしてみてはどうですか。



自分らしく生きる

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 2年

よこ やま けい と
横山 恵都

私の名前は「恵都」だ。両親が心を込めてつけてくれた唯一無二のこの名前が私は好きだ。

この名前は私にとって「自分らしさ」について考えるきっかけを与えてくれたものもある。小学生のころ、先生がみんなの名前を一人ひとり呼んでいた。そして私の番になった時、私は自分の耳を疑った。先生が私を「恵都君」と呼んだからだ。戸惑う私に、友達が言った言葉を今でも覚えている。

「だって男の子みたいだよ、けいっていう名前。」

衝撃を受けた。私自身は男性のような名前だと感じたことなどこれまでなかったが、私の名前は周りの人にはそう思っていたのだろうか。その時は曖昧に受け流したが、胸の奥にもやもやしたものが残った。

その後も同じように間違われることやからかいでの付けされ事が何度か続き、そのたびに私は自分の名前に自信がもてなくなっていた。相手に悪気はなくとも、君付けになると自分が自分でないような気がして強い違和感を覚えた。そして、「こんな名前ではなくて、もっと女の子らしい名前だったら良かったのに」という思いがどんどん積もっていった。

幼稚園に通っていたころの私は、よく外で遊ぶ活発な性格で、男子とも喧嘩していた記憶もある。自分がいいと思えば、周りと違っていても押し通すような気の強さもあった。けれど、私のそんな一面は「女の子らしくない」と思い、控えめでいることを心がけるようになり、私は周りから浮かないように、おとなしく日々を過ごすようになっていた。

そんなある日、偶然出会った言葉が私の心に響いた。「『自分らしく』を一番に」これはLGBTQの方のインタビューにあつた言葉だ。私はそれまで、LGBTQの人々に対して少し壁を感じていたが、インタビューを読むうちに、性別という枠に囚われないその人らしい生き方が眩しくみえてきた。「男らしく、女らしく」ではなく「自分らしく」。その考え方には、私にはなかったものだった。

それから、私は少しずつ自分の心のままに行動するように心がけてみた。そうすると、いろいろなことが気にならなくなっていた。今、私には女子と同じくらいの友達がいるし、学校ではスカートではなくスラックスをはくことが多い。スラックスをはいている女子は学年で数人なので、初めてスラックスで登校した時は少し緊張したが、みんな「スラックス、似合うね」と言ってくれ、私はそのことを素直に嬉しく思った。自分らしく過ごす毎日は、とても楽しく充実している。

「自分らしく」という言葉に出会い、もう一度自分の名前について考えた。恵都というこの名前は人によっては女の子らしくないと感じられるかもしれないが、私にとって最高に自分らしい名前だ。私は今、この名前でよかったと心の底から思っている。

今後「恵都君」と呼ばれることがあったとしても、もう気にしない。私は私として、胸を張って生きていきたい。そして、違いや個性に触れたとき、それを固定観念の「らしい、らしくない」という見方で判断するのではなく、それがその人らしさ、その人である証なのだとそのまま受け止める自分でいたい。

人はみんな違う。違うからこそ世界が色鮮やかなのだと思う。「違う」ということに対する恐れや偏見はすぐにはなくならないかもしれない。だが、自分一人でもそう考えることが壁を取り払う第一歩となる信じている。誰もが個性をいかし、自分らしく生きることが当然とされる社会が創られること、それが私の願いだ。





MRT宮崎放送
い が ゆ き ひ ろ
伊賀透浩 アナウンサー

Profile

1985年3月 宮崎市立鹿村野小学校卒業
(当時は宮崎郡田野町立鹿村野小学校
平成20年廃校、田野小学校に統合)
1988年3月 宮崎市立田野中学校卒業
(当時は宮崎郡田野町立田野中学校)
1991年3月 宮崎日大高等学校卒業
1995年 日本大学文理学部卒業
2014年 MRT宮崎放送入社

みなさんに質問です！

「ラジオ」を聴いたことはありますか？

おそらく聴いたことがない人が多いのでは？

今や音楽はサブスクなど配信で手に入る世の中、僕が中学生の頃は、好きな音楽は「ラジオ」で聴き、それをカセットテープに録音するといった時代でした。

放送局に曲を電話リクエストして、自分のメッセージが紹介されるとクラスでちょっとしたヒーローになれる感覚でした。

軽妙なトークでラジオリスナーに語り掛けるアナウンサーの声。

みなさんと同じ14歳ぐらい、僕が、この職業を目指し始めた頃です。

そして、14歳で憧れたMRT宮崎放送のラジオスタジオで、今、51歳の僕が喋っています。

「音声」だけで想像力に訴えかける「ラジオ」の尽きない魅力。

ぜひ聴いてみてください。



さて、憧れから簡単に夢が叶ったように見えるかも知れませんが、大学を卒業して、すぐにMRTのアナウンサーになれたわけではありません。僕が就職活動をする時期には、MRTではアナウンサーの採用がありませんでした。他県の放送局に就職する道を選び、40歳を過ぎてようやく、MRTのアナウンサーになることができました。

みなさんも、これから思い通りに行くこと、行かないこと、様々な壁にぶつかることがあると思います。この歳になって僕が思うのは、「成功」も「失敗」も全て自分の財産になるということです。むしろ「失敗」や「遠回り」から学ぶことが多かったと思います。

全ての経験は自らの「アップデート」に繋がっています。14歳のみんなの「可能性は無限」、「未来は白紙」です。自分の夢を真っ白なキャンバスに描いてください

Update!
未来は白紙
M.R.T. 宮崎放送
伊賀透浩

参考資料

立志式（集い）とは

人生にはいろいろな意味での節目があります。代表的なものに、七五三のお祝いがあります。七五三は、その年齢まで健康に育ったことを皆でお祝いし、さらにこれからの健康を願う習慣です。

大事な人生の節目に成長を祝い、自覚を促す儀式の意味を考えることは、今の中学校時代を意義あるものとし、将来への第一歩を踏み出す上で大切なことです。

かつての武士社会においては、人生の通過儀礼として、数え年15歳の立春の日に元服式が行われていました。この日を境に、髪型や衣服もそれにふさわしいものに替えて、社会から一人前の人として認められ、大人の仲間入りをするという人生の大きな節目としていました。

立志式（集い）は、昭和38年日本児童文芸家協会の提唱で、14歳という心身の発達の節目と多感な年齢を踏まえ、**自覚・立志・健康**の目標を掲げて、日本各地で儀式として行われるようになりました。

現在では14歳から少年法が適用されていることから、社会的責任が負わされることとなり、節度と自覚のある生活が求められています。

名言

『三計の教え』

一日の計は朝にあり



一年の計は春（元旦）にあり

一生の計は少壮の時（少年時代）にあり

＜出典＞ 安井息軒（幕末の儒学者 1799～1876）
が開いた三計塾の「塾記」にある言葉

意味

三つの計はすべて始まりを指しており、何事も初めが大切であるという考え方をもとに「今日という日は二度と戻らない。一日一日を、その時その時を大切に一生懸命勉強しなさい。」という教え。

「人生は若いうちこそ大事であり、しっかり勉強しなさい。」という塾生へのメッセージ。

－宮崎の偉人「安井息軒」－

宮崎郡清武郷（現在の宮崎市清武町加納）出身の江戸時代の儒学者。安井息軒が大成した儒学の教えは、江戸期における学問の集大成と評価されている。延べ2000人の塾生が息軒のもとで学び、明治時代に活躍する人材を多く輩出した。

（参考）「宮崎県郷土先覚者」（宮崎県総合政策部みやざき文化振興課）